

特集 水で蘇る都市

● 都市再生に

水辺が果たす役割とは

都市における水辺再生の意義

高橋 裕

「水の都」が都市を再生させる

陣内 秀信

ビオトープが都市にもたらすもの

市川 憲平

対談

川に関わる人を増やすことで、

川の復権が実現できる

北辻 稔 × 弘本 由香里



都市における水辺再生の意義

高橋 裕

Written by Yutaka Takahasi

駿河湾の海辺

静岡県興津町(現静岡市清水興津)に生まれた私は、駿河湾の一角である興津の砂浜を決して忘れることはないであろう。夏は毎日、よつにこの砂浜へ行って泳ぎ、燈籠流しを眺めて夕涼みを楽しんだ。駿河湾を抜きにして私の幼少時代は考えられない。三保を近景に、長く横たわる伊豆半島を遠景に海辺に連なる東海道の街並みは、万葉時代から歴史の重みと深い文化の香を漂わせている。この最大の演出者は、湾岸を洗う波であり、遠景の極致とも言える富士山である。

その興津海岸も、高度成長期に清水港に取り込まれ、海にはハイパス道路が築かれ、西園寺公が愛でた「坐漁荘」の海は埋め立てられ、かつての袖師の海水浴場も、興津の砂浜も失われた。失われて初めて私たちは、海辺の街の価値を知る。海辺、川辺、湖畔においてこそ人間と自然は触れ合い、語り合う、かけがえない機会を持つ。

安倍川と静岡市

一九三五年、私は興津町から静岡市へ引越した。静岡市は久能山東照宮と駿府城、そして安倍川の街であり、名物はわさび漬けと安倍川餅であった。少年の頃の私にとって、安倍川は大河であった。家から三〇分ほど歩くと安倍川に到達したが、まずその川幅に圧倒された。それよりも安倍川は市民の膝元にあった。



安倍川から富士山を望む



現在の隅田川・吾妻橋付近の風景

川と水辺を忘れた戦後の日本人

後から判ったことであるが、静岡市民の飲料水の大部分は、安倍川の豊かな伏流水だからである。静岡市の西北郊外に広がる広大な平野のどの家にも、掘り抜き井戸の湧き水が四六時中、滾々と湧き出ている。地下水であるからほぼ定温で、夏は冷たく冬は温かく感じ、味は良く、まことに有り難い水であった。しかも、それを当然のように利用していた。ほとんどは使わない水であるから、そのまま家の前の幅一メートルほどの溝に流出していた。その溝にはいつもメダカ・ドジョウ・小鮒が群をなして泳いでいた。我が家への泊まり客の中には、その溝で洗面し、口を漱ぐ人もいた。安倍川は静岡市の下も流れ、市民を潤していたのだ。

戦後間もない一九四七年、

東大入学とともに静岡を離れ、東京西部へと引っ越した。東京の川といえば、江戸時代以来、隅田川であり、山手の人々にとっては多摩川であった。しかし、それらの川のすぐ近くに住む人々以外、必ずしも親しい川ではなかった。敗戦の痛手まだ癒えぬ東京人にとって、川辺を散策する余裕はなかった。

一九五七年のある夕、私は恩師・井口昌平先生の渡仏記念送別会に、友人を誘って隅田川畔へ赴いた。日本をし

ばらく離れる先生に江戸情緒を味わっていただくことの趣旨であった。ずっと隅田川へ行っていかなかった私は、干潮時の隅田川がこんなに臭いとは露知らず、事前調査もしなかったのは不覚であった。江戸時代、庶民の集いの場として繁昌した隅田川は、積極的に人々を拒否する川と化していた。川の水質は極度に悪化し、川辺周辺の景観は劣化を極めた。戦後の国土復興から高度成長期にかけて、全国のほとんどの都市河川は、経済成長と引き替えに、見る影もなくなっていた。当時、多くの日本人は、都市における川の重要性を忘れてしまっていた。経済成長の数値目標にのみ政策の重点が置かれ、川が都市の象徴であるとの認識は消え去っていた。水辺の無視は、人々の精神不安定をもたらしたのではないか。

ヨーロッパの水辺

その二年後、私もフランスへ留学し、まずセトヌ川のパリを見た。やがて留学先のグルノーブルでローヌ川の支流イゼール川に接した。フランスに限らない。ロンドンとテムズ川、リヨンとローヌ川、オルレアンや多くの古城とロアール川、ハイデルベルグとネッカー川、ウィーン、ブダペストとドナウ川、枚挙にいとまがない。これらの川はその街の中心を流れ、それらの川なくして都市の存在意義はないと言っても過言ではない。若い時代にヨーロッパの諸都市を眺め、都市の価値がそこを流れる川によって左右されることを実感した。

東京オリソピックは水辺を奪った

パリに旅してセトヌ川を見ない人はいない。その魅力に浸らない人はいない。日本を訪れる外国からの客は、皇居の濠は忘れられないかもしれ

ないが他にどの川が印象に残るだろうか。かつて江戸では、隅田川は庶民の憩いの空間であり、日本橋川筋は経済の中心として栄えた。一九六四年

の東京オリンピックは、江戸・東京の歴史に燦然と輝く大行事であった。その成功は、世界に日本、ひいてはアジアを評価させることもなった。しかし、そのために、多くの急場しのぎの開発によって、東京の川が犠牲になつたことを強く記憶しなければならぬ。

その頃、都市計画や行政の担当者は、高速道路を新幹線とともに土木技術の花形と考え、下水道普及にとまなう小河川の地下化は、新都市建設の象徴であるかの如き錯覚に陥っていたのではないが、東京オリンピック直前、日本橋川上空はすっかり高速道路によって覆われ、新宿御苑に水源を持つ河骨川は地下に潜した。

この高速道路は、なんと日本の道路元標がある日本橋の真上を通る、言うまでもなく日本橋は江戸時代初期一六〇三年(慶長八)以来、東海道の出発点であるのみならず、家康が国土整備の基本に据えた五街道、すなわち東海道・中山道・日光街道・奥州街道・甲州街道の全ての起点でもあった。以来、日本橋を中心に商業地区が拡がり、老舗が軒を並べ、江戸繁栄の源泉となり、日本橋川は江戸経済の発展軸となつたのである。お江戸日本橋と称されたように、名橋・日



高速道路で覆われた日本橋川と現在の日本橋

本橋は江戸のみならず日本の象徴的存在となった。江戸へ上がることは、まず日本橋に到達することであり、日本橋と日本橋川は、江戸・東京の文字通り原点であった。

現在の日本橋は、石造り二連アーチ橋として一九一一年に完成した。東京市橋梁課長の榊島正義と米元晋一の構造設計による名橋である。橋は単に構造美を備えるのみでは市民に受け入れられる名橋にはならない。その橋の周辺景観、架かる川との調和があつてはじめて悠久の美を放ち、文化的価値を發揮する。

この橋が架けられた明治末期、なお日露戦争勝利の興奮醒めやらぬ時代、この名橋の出現を最も喜んだのは日本橋川であつたに違いない。ましてや、やがて半世紀後、橋と川を完全に覆う高速道路が建設されるとは、日本橋も日本橋川も夢にも思わなかつたであらう。オリンピック開催の時限が定まっている以上、高速道路を他所に建設する時間的余裕も、計画再検討の余地もなかつたであらう。まことにやむを得ぬ決断であつたに違いない。しかしそれは緊急事態への特別配慮であり、仮橋であつたと理解したい。それにしても、途中でパウル崩壊があつたといえ、仮橋としては、東京オリンピックから四〇年間は長すぎる。日本橋建設から五三年にして、上空に高速道路が覆い被さり、それから四〇年、撤去と移設計画を早急に樹立しなければ、この橋と川に申し訳ないと感ずることこそ、都市における顔として川を位置づける市民の常識でなければならぬ。

春の小川の水辺は地下へ潜つた

暗渠と化した河骨川はやがて渋谷川となる都内屈指の名門河川である。高野辰之は一九二二年、河骨川の辺りを散策するのを日課としていたという。そして生まれたのが名歌「春の小川」である。地下に潜つたこの辺り、代々木五丁目小公園には歌碑が寂しげに立っている。

春の小川は ささら流る
岸のすみれや れんげの花に
にほひめでたく 色うつしく
咲けよ咲けよと ささやく如く

当時、下水道も高速道路も、わが国の水準は欧米先進国に大きく水をあげられていた。多くの社会資本整備の中でも、両者の普及度向上は至上命令でさえあった。ともかく急がねばならなかった。

ミントンははじめ、ヨーロッパのいくつかの都市では、下水道の一部を廃止して、下水道建設以前の河川の流れを復活している。河骨川に限らない、いすれ全国の都市で、地下に閉じこめられた川の一部を再び地上に戻してもらいたい。河骨川の下流、渋谷川でも再生運動が活発である。都市化によつて平常流量が著しく減少した渋谷川へは、落合下水処理場の処理水が、新宿高層ビル街に送られた後、地下を流れて、JR渋谷駅の下流側で渋谷川へ毎秒一立方メートル注ぎ込まれ、平常流量をどうやら確保している。

全国の都市で、下水道普及とともに都市内の小河川が地下へ押しやられたのには、もちろんそれ相応の理由がある。下水道は汚水とともに雨水排水も重要な役割である。下水道が普及すれば、市内降雨の排水は下水道が受け持つことになり、都市内の河川は不要になる。河川は「ゴミ捨て場や蚊の温床になり、臭いものには蓋」といつわけ、暗渠化される。

大水害多発時代の水辺

第二次世界大戦直後の十数年間、わが国土は、毎年のように大洪水による大水害に苦しめられた。一九四五年の枕崎台風から一九五九年の伊勢湾台風までの一五年間のうち一〇年間は、水害による死

者が毎年千人を越え、大型台風の場合は、一度に千人から五千人の犠牲者を数えた。水害日本と呼ばれたその頃、治水事業への国民の期待は大きく、頑丈な堤防、少しでも多くの洪水流量を処理できる大きな河川断面が熟望されていた。その頃、河川景観、堤防のデザイン、憩いの場、快適な散策の場としての河川は忘れ去られた。前述の臭い隅田川は、その典型例である。川は洪水をもたらす憎い存在とさえなっていた。より高い堤防を求める都市民の要望に対して、いわゆる「特殊堤」が多くの都市河川に築かれた。特殊堤とは、堤高を確保するために普通堤防の上に継ぎ足して「パツツト」(状に部分的に高くした堤防のことである。限られた広さの天端^{てんぱ}に対し、堤防を少しでも高くして洪水安全度を高める目的で造られ、およそ河川景観や散策者の気分などを考慮する精神的余裕がなかったことを物語る。堤防には限らない。多くの公共構造物は、機能と経済性追求にのみ特化



JR「渋谷」駅南東側で地上に顔を出す渋谷川

したが、敗戦直後から経済急成長に至る時代の風潮であった。河川事業もまた洪水水害軽減に重点が置かれ、他を顧みる余地が無かった。堤防のいわゆる三面張り(堤防のみならず、河底までコンクリートで固める治水工法)が横行したのも、この時代である。堤防強化のために、大部分の住民もそれを欲していた。上流部農村の、河幅の広くない河道は直線化され、真っ白いコンクリート護岸

に目が眩しいほどであった。その頃、その河川改修費獲得に東奔西走していた地元議員の評判はきわめて高かった。

川に対する人々の希望は、大洪水頻発に対処して効率よく洪水の流れを吐き出してくれることであった。やがて一九六〇年代の都市化時代を迎えて、都市への人口の急激な集中と工業化にともない、上水道と工業用水需要が急上昇し水不足時代が到来した。ダム技術の進歩は、水資源開発のためのダムブーム時代を出現させ、人々は川を、水資源を生み出してくれる有り難い存在と意識しはじめた。その頃、ダムは、水不足解消の決め手と認識され、それがやがて生態系への影響を含む、さまざまな環境悪化をもたらす、マヌエティアによる攻撃的になると予測する者は極めて少なかった。ましてや、都市における水辺の価値は、多くの市民の関心外であった。

環境問題が 自然観の見直しを迫った

こうして川は洪水排水路もしくは水資源生産の場という物理的欲求を満たす物理的存在と考えられた。それも戦後の国土荒廃、ひたすら経済的発展にひた走った経済急成長という、わが国の歴史でも激動の特異な時代の社会思想の故であったろう。その興奮の象徴が、一九六四年の東京オリンピックであり、一九七〇年の大阪万博であった。

しかし、七〇年代から台頭してきた環境問題は、過度の開発への牽制であり、経済成長に浮かれていた楽観ムードへの警告であった。当初、水質汚濁、大気汚染などの公害問題に端を発した段階では、特定企業が槍玉にあがっていたが、やがて自動車の排気ガス、家庭雑排水が汚染源となり、原因者が不特定多数となるに及んで環境問題は、全社会的課題となった。さらに環境問題は、地球環境問題へと発展した。二〇世紀後半における、全世界をあげての旺盛な開発は、その反

動として公害問題という局地的問題にはじまり、地球の限界を越える地球環境問題に至って、人類と地球にとつての重大課題となった。

環境問題の深刻化は、自然と人間による技術開発を問い直す契機となった。一九八〇年代に入って、河川と人間との関係に、全国各河川で新しい運動がはじまった。マヌエティアが特に注目したのは、ダムや河口堰、あるいは大規模河川改修事業への反対運動であった。それらの中には、後日、結局中止となった石狩川水系の千歳川放水路。社会問題として九〇年代に盛り上がった長良川河口堰。現在も続いている川辺川ダム、八ツ場ダム、徳山ダム反対運動がある。さらには、多くの河川で燃えてきた、住民の河川計画への参加問題、そして河川景観、河川、湖沼などの水辺空間の再構築が、全国河川において盛り上がってきた。

僭越ながら、私が係わつた例を紹介すれば、一九八八年に東京都から委託された、隅田川未来像委員会報告がある。隅田川兩岸にスーパー堤防(天端幅を数十メートルに拡げ、その堤上に都市再開発を展開し、堤防の川面にはテラス護岸を設け、治水安全度向上、河川景観、アメニティに考慮した新しい設計の堤防)が提案された。現段階で隅田川総延長の約四割が完成しているが、全川流域の完成までには、さらに数十年を要するであろう。いち早く完成したテラス護岸には、数十張のホームレス・テントが連なつたのは予想外であった。居心地が良い証拠かもしれない。

一九九二―九三年にかけて、日本橋川環境整備計画検討委員会が、リバーフロント整備センター内に、建設省河川局、東京都、首都高速道路公団の参加を得て設けられた。当時の河川局治水課長松田芳夫さんの依頼で、私がまとめ役を務めた。そこで、日本橋川を覆う高速道路を地下に移すとすれば、約一兆円の工事費と推算された。本稿は、その内容解説が目的ではなく、八〇年代後半から、この種の水辺空間を含む河川再生の機運が都市計画の一環として醸成されてきたことの証明に留める。

ヨーロッパ各国やアメリカの河川においても、同じく八〇年代から河川再生が盛んになっている。ドイツやスイスにおける、植生や自然材料

を用いる、いわゆる近自然型河川工法の日本への紹介も、これらの機運に拍車をかけた。一九七〇年代まで、洪水対策、水資源開発が主力であった河川事業は、一九八〇年代に鋭く転換しはじめた。九〇年代に河川行政の曲がり角に襲いかかったのが、長良川河口堰問題であり、行政が打った決め手が、九七年の河川法改正であった。改正の目玉であった河川環境の整備と保全には、河川景観も含まれる。

都市計画における水辺再生の意義

水辺再生による都市計画は、本来の都市民と水辺とのあるべき関係の再発見である。それは歴史的に考察すれば、決して新しいことではなく、二世紀の重大課題としての復古事業なのである。江戸時代における隅田川の賑わいは、広重の多数の版画、多くの文学に集う人々の笑顔とともに、われわれの眼を射る。江戸末期から明治初期に、日本を訪れた多くの外国の識者が、日本人の水路や水辺のあしらいに感嘆している。元来、日本人の水路・水辺・井戸水・溝などの水風景を日常生活に取り入れる水生活の豊かさ、優雅な姿勢は、水を要とする日本の風土、四季の微妙な変化に鍛えられた水感覚の鋭敏さとともに、日本人の誇るべき資質であった。

明治以降の世界を驚嘆させた近代化の成功は、日本人特有の古来のこの資質を、心ならずも犠牲にして成し遂げられたといえる。西欧科学技術の圧倒的偉力の前に、日本人の自然との妙なる付き合いの感覚は麻痺した。その具体的情景は、都市民と川との関係である。隅

田川や鴨川など多くの都市の川の明治初期までの関係を想起しよう。二世紀は、日本近代化過程の一九世紀末から二〇世紀に忘れ去られた日本人の豊かにして鋭い水感覚を、日常生活において、都市計画における水辺デザインにおいて復活する世紀としなければならぬ。農村において、水の流れを庭に導く感覚、都市近代化以前に都市にも農村にも至る所に、巧まずして組み入れられていた水の借景などに表現されていた日本の水風景を再現するのは容易でないが、現代の都市や農山村において、新しい水風景を創設する感覚は、日本人の脳裡と五感になお宿っているはずである。都市の水辺再生は、単なるデザイン上の課題ではなく、開発に陶酔した前世紀の反省に根ざした、新たな日本の風土の形成の一環として位置づけられてこそ、大輪の花を芳しく咲かせることができる。

() (Parapee) 屋上、バルコニーなどの端部に設ける低い手すり壁のこと。

高橋 裕(たかはし・ゆたか)

国連大学上席学術顧問、東京大学名誉教授。一九二七年静岡県生まれ。五〇年東京大学第二工学部土木工学科卒業。五五年同大学院(旧制)研究奨学生課程修了。同大学工学部専任講師、同大学教授、芝浦工業大学教授などを経て現職。専門分野は河川工学で、自然としての河川と人間とのよりよいつきあい方を一貫して追究。主な著書は、『河川工学』(東京大学出版会)、『都市と水』(岩波新書)、『水のはなし』(技報堂出版、編著)、『地球の水が危ない』(岩波新書)、『河川を愛するということ』(山海堂)など。